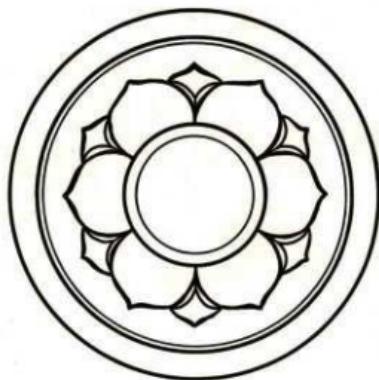


八尾市文化財調査報告 8
昭和56年度国庫補助事業

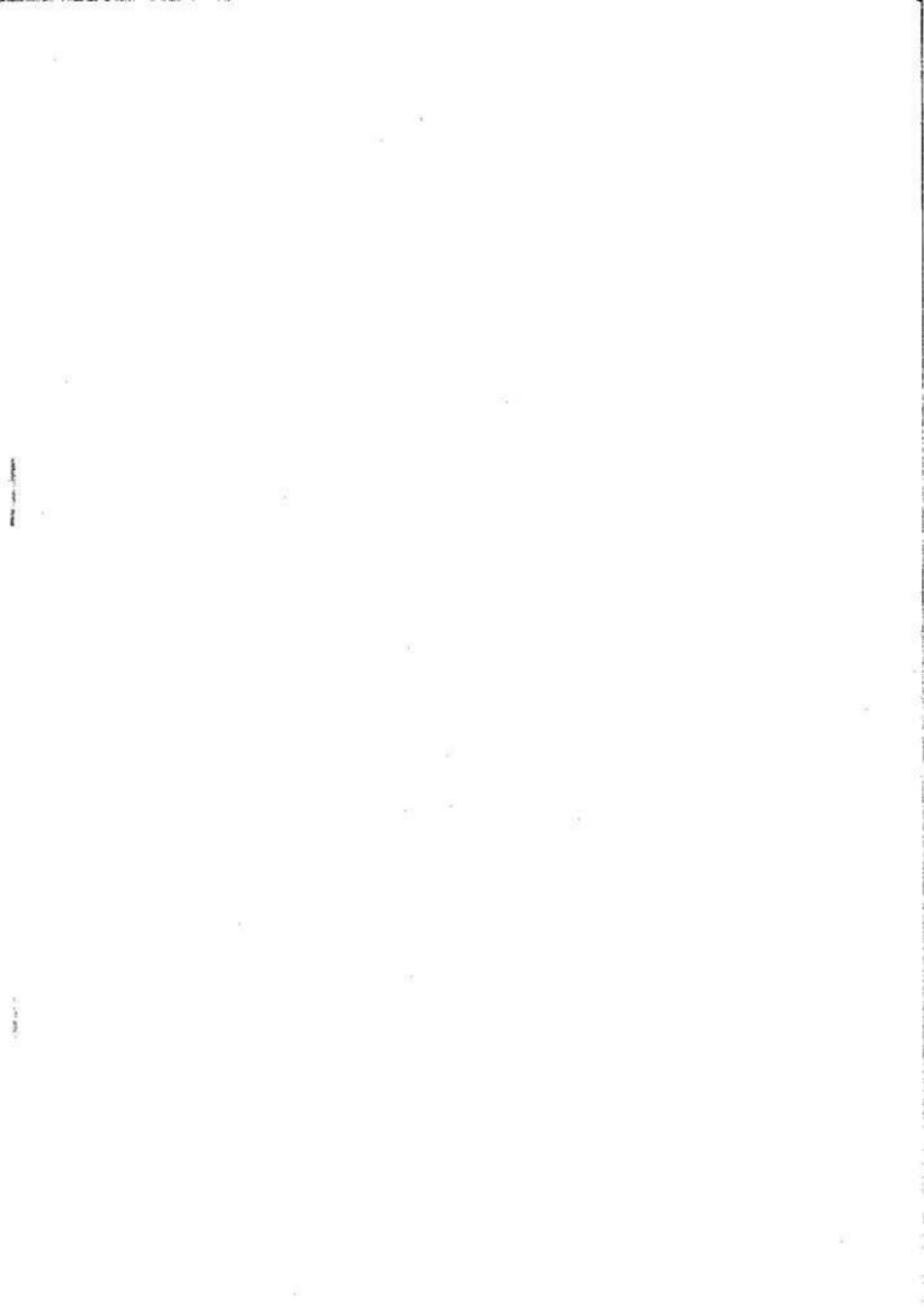
宮町遺跡発掘調査概要 I

—穴太神社境内廃千眼寺の調査—



1982. 3

八尾市教育委員会



はじめに

河内平野は古来よりいくつもの歴史の舞台となってきたところであります。とりわけ八尾市域には有名、無名の史跡が数多くあり、なかには長い歴史の中に埋もれ、忘れ去られようとしているものさえあります。今回調査した千眼寺跡もその一つで、現在ではその存在を証明する文献すらほとんど残っておりません。しかし、発堀調査によっていくらかの事実にせまり得た事は貴重な成果であるといわねばなりません。宮町遺跡は市内でも有数の中世遺跡であり、今後の調査によってその実像もしだいに明らかになることでしょう。今回の調査では、その基礎資料を提示することができました。最後に、調査に御協力をいただいた地元の方々に感謝の意を表するしだいです。

教育長 坂本正一

例　　言

1. 本書は、八尾市教育委員会が昭和50年度国庫補助事業の一環として実施した八尾市宮町所在、宮町遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は米田敏幸、原田昌則が、八尾市教育委員会文化財室主幹山本昭の指導を得て実施した。
3. 調査に要した期間は昭和56年7月10日より昭和57年3月31日までである。
4. 本書の編集執筆は、米田敏幸・原田昌則・駒沢敦が行ない、トレース製図は池田まゆみが行なった。
5. 調査に際しては、高萩千秋、高木真光、黒川富久雄、中野慶太、野田雅彦、駒沢敦、浅井賢一、池田まゆみ、吉田高子他、諸氏の協力を得た。
6. 記録の作成には実測図、写真の他カラースライドを作成した。広く利用されることを望む。

目　　次

穴太神社境内発掘調査概要	1
宮町一丁目出土の中国磁器	24
八尾市域における中世瓦の新資料	25
千眼寺と千福寺について	28

穴太神社境内埋蔵文化財発堀調査概要

1. 調査の経過

宮町遺跡は、河内平野の中央部旧大和川の本流である長瀬川右岸の沖積地に位置する中世遺跡である。ここは旧地名では「河内国若江郡穴太村」に属し、現在の大阪府八尾市宮町一帯に所在する。当遺跡の西及び北側には、弥生時代～鎌倉時代の集落遺跡である佐堂・美園遺跡が位置し、東側1kmには古墳時代の集落遺跡である東郷遺跡が所在する。また、南500mの旧西郷村には常光寺・大信寺をはじめとする中世～近世の寺院や寺跡が多く見られ、さらに南西側の長瀬川対岸には顯證寺を中心として中世末期に形成された久宝寺寺内町が存在する。このように、河内平野中央部には古代から近世に至る数多くの遺跡が立地しており古来より歴史の舞台となってきた地域である。

今回調査を行なった千眼寺跡はこの宮町1丁目の穴太神社鎮守境内を中心として所在する寺院跡で、付近には「寺の内」と呼ばれる小字名が近年まで残っていたと伝えられている。この千眼寺という寺院は今日の我々の知見ではそれについて書かれた文献は何一つ残っておらず、わずかに『河内鑑名所記』や『和漢三才図会』等の近世の文献に「大日山千眼寺の旧跡」

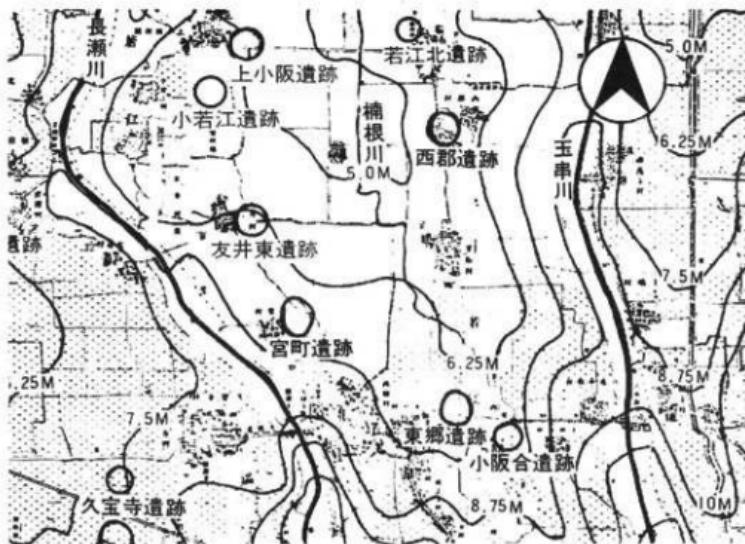


図-1 周辺の遺跡分布図

あるいは「今唯無寺有礎耳」とあるだけである。穴太神社境内には古瓦が出土することが從来から知られ、また寺院の建物の基礎に使用されたと思われる礎石が累々と横たわっている。八尾市教育委員会では昭和56年度の国庫補助事業として同神社境内の整備に際し、地下に埋没する遺構の遺存状況を確認するための発掘調査を実施することにし、同神社管理共同組合に承諾を求めた。調査期間は昭和56年7月10日より現地調査を開始し、昭和57年3月31日に整理を含むすべての調査を終了した。

調査の方法は、穴太神社境内の旧社殿北側に2ヶ所、旧社殿下に3ヶ所、境内北側に2ヶ所の計7ヶ所にトレンチを設定し遺構遺物の検出を行なった。現地調査後は出土したすべての瓦の洗浄を行ない、主要遺物の資料化と報告書の作成を行なった。

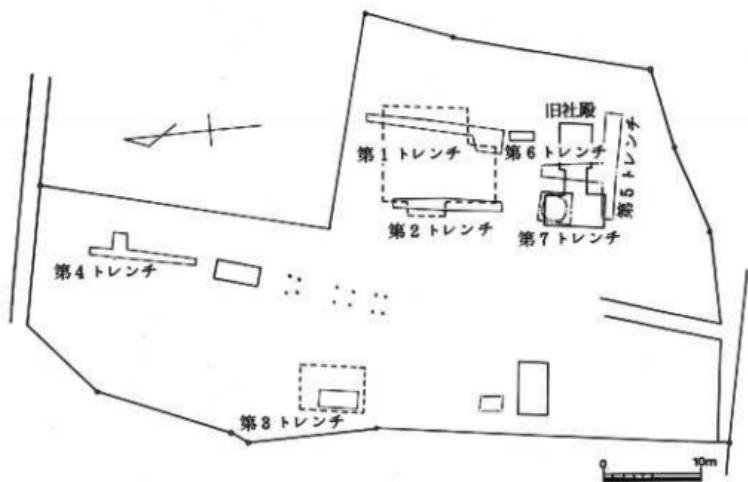


図2 調査区位置図

2. 調査の概要

第1トレンチ

旧社殿北側の東に $1\text{m} \times 1.8\text{m}$ の南北方向のトレンチを設定した。表土は暗灰色の腐植土で北側で 2.0cm 、南側で 4.0cm を測る。第1層の暗褐色砂質土は南側で厚く、北側ではこの層内に瓦礫を検出したが、小片の瓦が多い。第2層の褐色砂質土をベースとした深さ 4.0cm の落ち込みの中に堆積している。

さらにトレンチ南側では、灰褐色砂質土層（第3層）の下、GL-170cmの黄灰色砂層上面より切り込んで黒灰色粘土の堆積する落ち込み遺構が存在する。この遺構は深さ 5.0cm を測り遺構上面から瓦・陶磁器・石仏などが出土している。この下、GL-220cm以下は青灰色シルト層となる。

第2トレンチ

旧社殿北側の西に $1\text{m} \times 1.2\text{m}$ の南北方向のトレンチを設定した。トレンチ内の土層は基本的には3層に分けられる。第1層は暗褐色の砂質土層で南側が 7.5cm 、北側は 8.8cm の厚みがあり南側に高く盛られた土層である。第2層は褐色砂質土層で、この層も北側 2.0cm に対し南側 4.0cm と南へ厚く堆積している。第3層の灰褐色砂質土の上面はほぼ水平である。トレンチの南側では第3層の下に淡灰色砂層があり、この層の上面及び第3層の下は暗褐色粘土層で、その下は青灰色シルトである。

第3トレンチ

境内北側の参道付近の倉庫予定地に $2\text{m} \times 4\text{m}$ の南北方向のトレンチを設定し、GL-140cmまで掘り下げた。トレンチ内の土層は5層に大別できる。第1層は暗褐色砂質土層で、第2層が淡黃灰色砂質土層である。第1層の下、第2層の上面付近に屋瓦片の包含が認められる。第3層は淡灰白色砂質土層で非常に固く結まった土層である。この層には奈良時代の須恵器片がわずかに認められた。第4層は淡灰褐色砂質土で、第5層は灰褐色粘土であるが遺物の包含は認められなかった。

第4トレンチ

境内の北端、稻荷社裏に $1\text{m} \times 1.1\text{m}$ の南北方向のトレンチを設定した。トレンチ内の土層は3層に大別でき、第1層、第2層は暗褐色砂質土で若干の土質の差で分層できる。第2層内に屋瓦を多数含んでいる。第3層は固く結まった褐色砂質土層で、この上面がベースになるも

のと思われる。第2層の屋瓦を取り上げると、トレンチ北側の第2層下面で礎石に使用されたかと思われる板状の石材を検出したため、そこより東へ2mトレンチの拡張を行なった。その結果、この石材より2m東にも同様の石材が存することが確認できた。また、両者の間には焼土塊や瓦が折り重なって存在していた。このベースはトレンチ南側で高く、北側で約50cm低くなっている。また、トレンチ北端ではベース直上に瓦溜め状の堆積層がみられる。

第5トレンチ

旧社殿下南よりに東西方向の $1.5 \times 1.2\text{ m}$ のトレンチを設定した。トレンチ内の土層は、上層に暗褐色砂質土が調査区全域にわたって1mの厚さで2層に分かれて堆積している。この第2層目の暗褐色砂質土内に第3層褐色砂質土を切り込む形で、瓦溜め2、瓦溜め3が存在する。瓦溜め2は第5トレンチ中央から第6トレンチにまたがって存在する円形を呈する集積遺構であるが、第5トレンチ北側、第6トレンチ東側へ深く落ち込むようである。瓦溜め3はトレンチ西側で検出されたが、その広がりは南ではなく北側に広がるようである。トレンチの東側は第3層褐色砂質土が落ち込んで黒灰色砂質土が堆積している。この層内は炭化物を多く含み、土師小皿や瓦片などを含んでいる。第4層は黄灰褐色砂質シルト層で、上面はGL-180cmとなり、第5・6トレンチ全面にわたり水平に堆積している。

第6トレンチ

旧社殿下に第5トレンチの瓦溜め2の部分より直交する形で南北方向のトレンチを設定した。トレンチ内の土層の堆積状況は第5トレンチと同一である。トレンチの南側では瓦溜め2の一部を検出した。北側の部分で第4層黄灰褐色砂質シルト層を掘り下げたところ、30cm下に暗褐色砂質土層が認められ、この層の上面にもわずかながら瓦の堆積層が認められた。

第7トレンチ

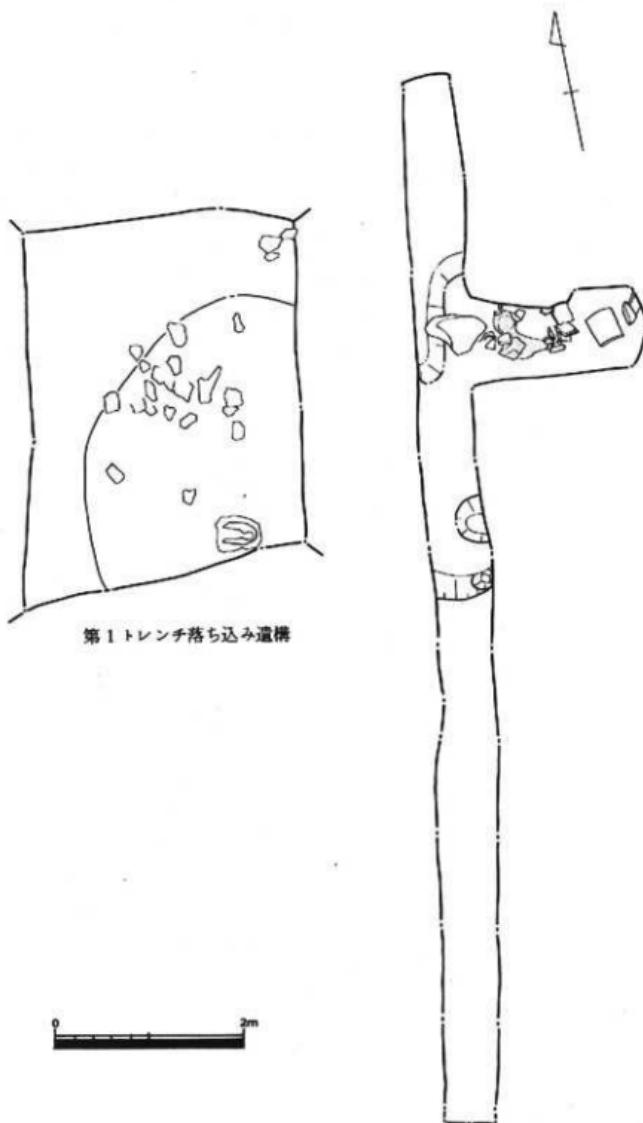
旧社殿の下、第5トレンチの北3m、第6トレンチの西2mに設定した $3 \times 3\text{ m}$ のトレンチである。トレンチ内の土層はGL-240cmまで10層に分層できる。第1層は暗褐色砂質土層でほぼ1m堆積する。第2層も暗褐色砂質土で瓦片を含む、第3層褐色砂質土、第4層黄灰色砂質土層は固く締まった土層であるが瓦片を若干含んでいる。この第4層と第7層淡灰色粗砂層との間に瓦片、焼土塊を含む層(第11層)が挟まっており、トレンチ中央を東西方向帯状に続いている。また第7層上面には瓦片の他、瓦器片も含まれている。8層は灰色粗砂が20cm堆積し、以下は9層淡茶灰色粘土～11層灰色粘土層まで粘土質の厚い堆積となっているが、

ここまで掘り下げるも瓦片を検出しておらず山に達することはできなかった。

調査のまとめ

今回の発掘調査はすべてトレンチによる調査だったので、地下に残る遺構の全容を把握するには至らなかった。しかし第4トレンチにおいて遺構と呼べる礎石や、第4・第7トレンチで検出した焼土塊、第5・第6トレンチで検出した瓦の集積などはそこに遺構面の残存を確實に予察させるものであって、当初の「地下の遺構の遺存状況を確認する」という目的はほぼ達成できたといってよい。各トレンチの層位の対応関係を考えてみると、第1層となっている暗褐色土は境内全体に広がっており現在の神社の地表となっている。この土層は境内北側の第8・第4トレンチでは約40cmと薄く、南側の旧社殿付近の第5～第7トレンチでは1m以上の堆積を示す。これは旧社殿を造営するため、ここに土盛りを行なった結果であろうと考えられる。第4トレンチの瓦の堆積層をとり除いたベースとなる層（第3層）は、第5・第6トレンチの瓦留め2、3のベースとなる層（第3層）に対応し、2の層上面での標高は8.50mではば同一となる。そのため、この面はある時期の遺構面となる可能性を示している。第7トレンチで検出した焼土を含む層はさらに下の層となり、ここにもある時期の遺構面が存在することを示している。それは第2トレンチ南側でみられた第3層を挟む地層の重なりとなってみられる。しかし、さらに下の層まで瓦片が出土するため、寺の創建時の遺構面はまったく把握できなかった。第1トレンチには第8層まで近世陶磁器が出土し第4層をベースとする近世の遺構が存在するため、かなり後世の擾乱を受けている可能性が考えられる。しかし、第2・第7トレンチの土層の堆積から、第1トレンチ、第2トレンチが位置する旧社殿の北側はもともと陸地となっていたようである。

（米田）



第1 トレンチ落ち込み遺構

図3 遺構平面図

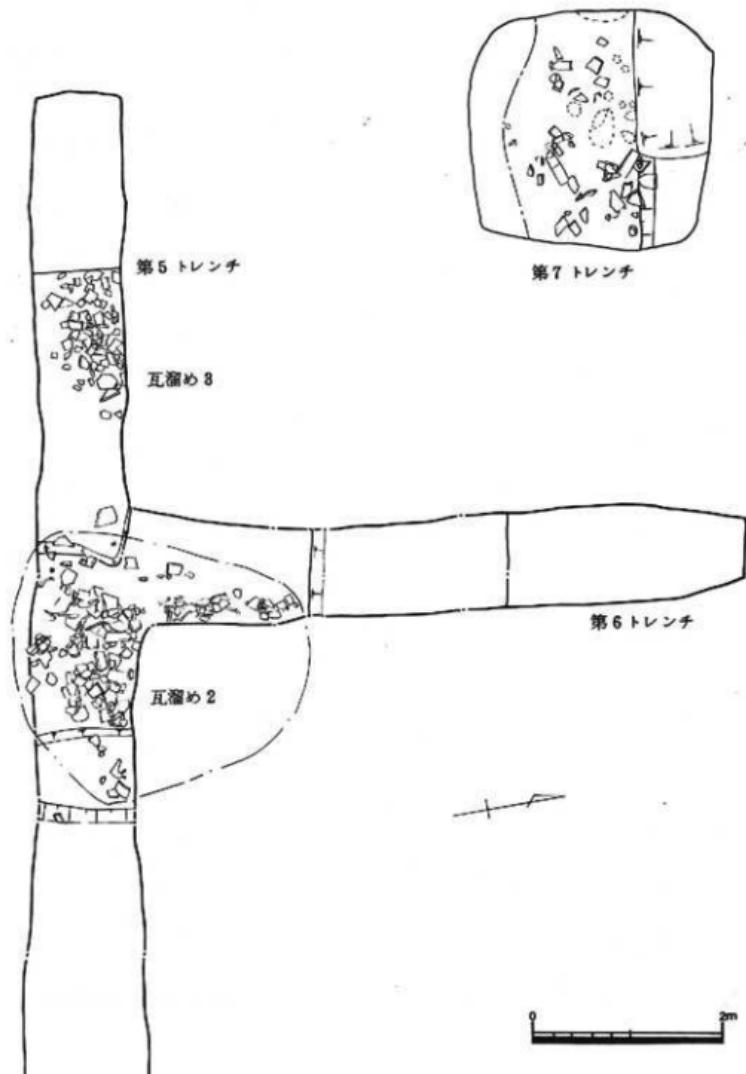
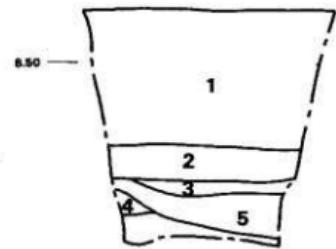
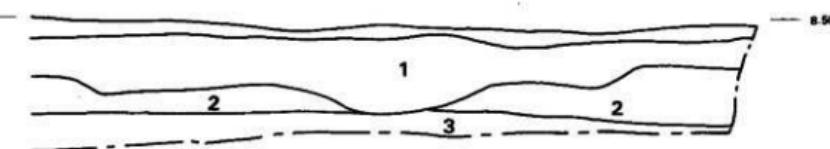
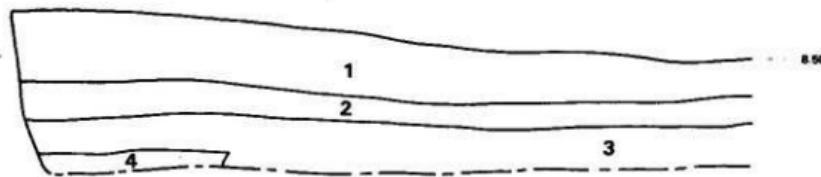


図4 遺構平面図

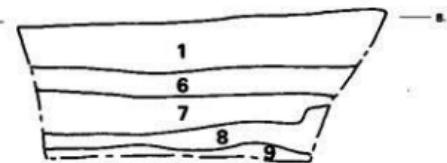


第1トレンチ



第2トレンチ

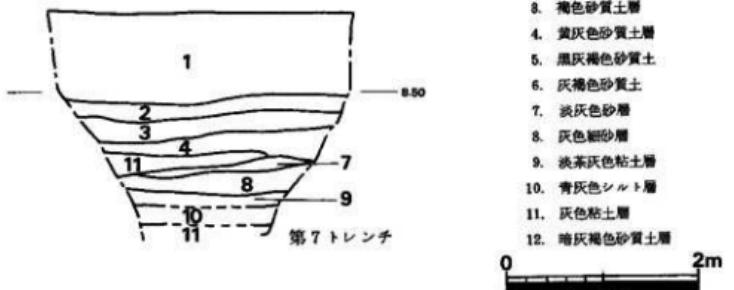
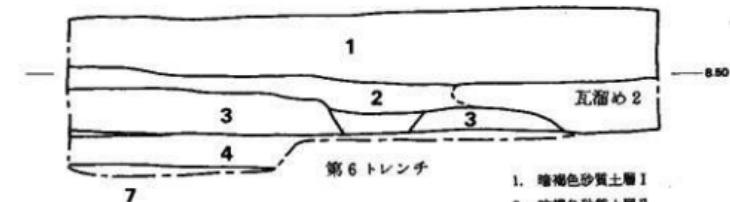
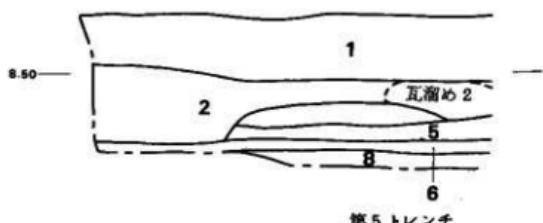
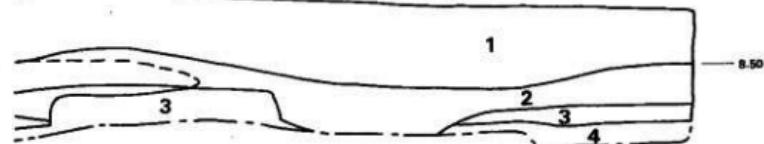
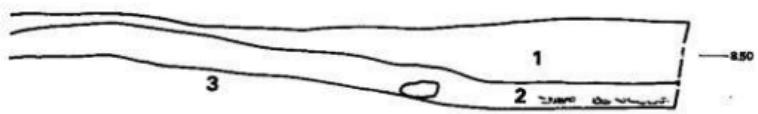
- 1. 増褐色砂質土層
- 2. 褐色砂質土層
- 3. 灰褐色砂質土層
- 4. 淡～黄褐色砂層
- 5. 黑灰色粘土
- 6. 淡黃灰色砂質土
- 7. 淡灰白色砂質土
- 8. 淡灰褐色砂質土
- 9. 灰褐色粘質土



第8トレンチ



図5 トレンチ断面図



0 2m

図6 トレンチ断面図

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、屋瓦類が主で、コンテナ数にして50箱にのぼる。この他、近世陶磁、石仏等が出土している。

瓦類

瓦には、軒平瓦、平瓦、丸瓦、羅振瓦、鬼瓦等がある。これらは、文様や形態、表面の調整技法などによっていくつかの類型に分類することができる。

(1) 軒丸瓦

蓮華文軒丸瓦 I類(図7・1.2)

複弁八葉の蓮華文を持つ瓦で、瓦当の径は15.2cmを測る。中房の蓮子は1+6で、周囲に径7.2cmの圓線を持つ。花弁は短く丸い。花弁の中央を界する線はなく、子葉も認められない。

瓦当面凸部には、板目と思われる縞状の痕跡がみられる。丸瓦との接合部断面は、瓦当に丸瓦先端を喰い込ませた印籠つぎにより接着している。

蓮華文軒丸瓦 II類(図7・3)

重弁六葉の蓮華文を持つ。中房は素文で、径5cmの圓線を持つ。蓮弁は丸く先は尖がって浮き出しており、子葉が主葉の間に重なって表現されている。外縁は素文で幅0.9cmを測り、内に段を有する。蓮弁及び中房の凸部には指紋がのこる。丸瓦との接合部断面は、瓦当部背面のわずかな段のところに丸瓦端面を接着する。丸瓦部凸面は側面平行の細かいヘラケズリが行なわれている。この種の瓦は平安宮大極殿や香川県のますえ煙函窯などに同じモチーフのものが出土している。瓦当径は12.2cmを測る。

菊花文軒丸瓦(図7・4)

菊花様の細く長い弁を持つ。中央には珠点を持ち、弁は16弁である。外縁部は粘土をつき足して高くつくっている。丸瓦部の内面には布目、外面にはヘラケズリの痕がみられる。表面には焼しがかかるものと思われるが、表面の摩耗が著しい。瓦当径は10.5cm、外縁幅1.2cmを測る。

巴文軒丸瓦 I類A(図7・5)

内区は左巻き三つ巴で、外区は珠文を挟んで内、外各1本の圓線がめぐる。巴は細く長い尾を持ち、頭部は丸い。蓮珠は26~28個配するものと推定できる。丸瓦部は、外面に側面平行のヘラ割り、内面に細かい布目がみられる。表面には焼しがかかり、瓦当径16.5cm、外縁幅1.2cmを測る。

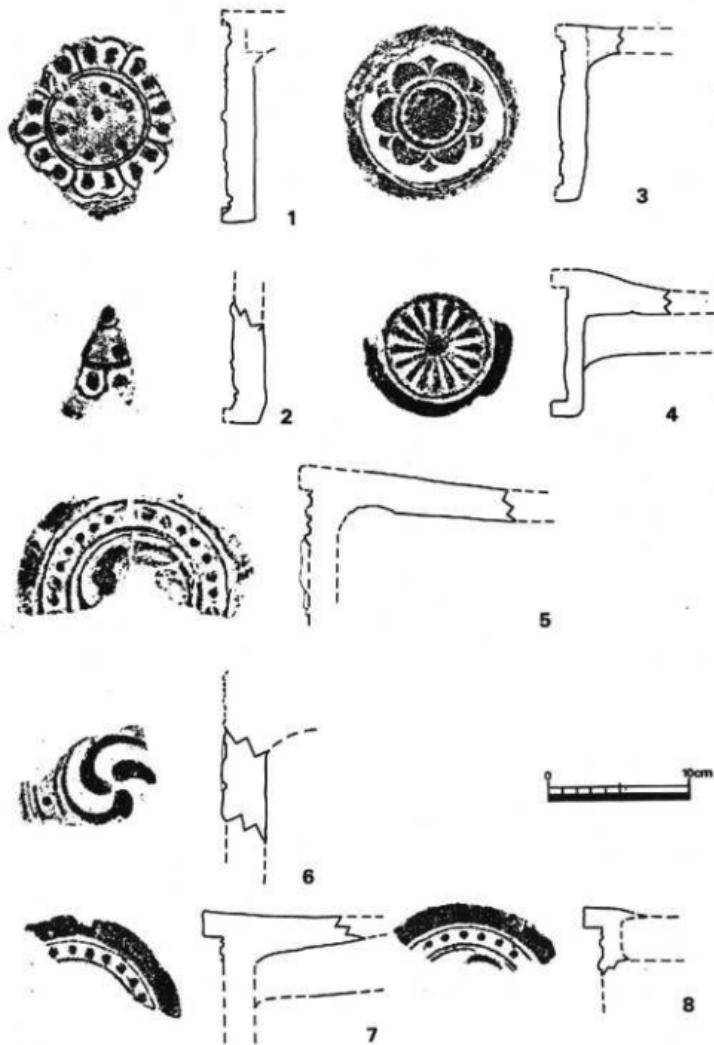


図7 軒丸瓦

巴文軒丸瓦 I類B(図7・6~8)

文様モティーフはI類Aと同じであるが、珠文内、外の縁線の間隔が狭く珠文も密である。また、外縁はきわめて高く、幅は1.4cmを測る。丸瓦との接合部断面は、瓦当背面を割り込み丸瓦を接合する印籠つぎとなる。瓦当径は14.8cmを測る。

巴文軒丸瓦 II類(図8・9)

内区は突出し、右巻き三つ巴が描かれる。巴の頭部は三角を呈し、短かく太い尾を持つ。外区には大粒の珠文を挟み、外側に1本、内側に2本の縁線を持つ。外縁は幅狭に突出し、幅0.5cmを測る。丸瓦との接合部断面は丸瓦の先端下部に粘土板を嵌め込み瓦当面とし、その後に施文を行なう。丸瓦部外面は側面平行のヘラケズリ、内面は細かい布目が残る。表面には燃しがかかる。

巴文軒丸瓦 III類A(図8・10~14)

内区は右巻き三つ巴で、巴の先は丸みを持ち、内へ尖がる頭部より半周まわる尾を持つ。外区は縁線をめぐらし、外側に推定24~28個の小粒で密な珠文を配する。外縁は高く、幅1.8cmを測る。丸瓦との接合部断面は、瓦当の背面に丸瓦を接着した後、さらに粘土を瓦当背面に充填する。瓦当径は13cmを測る。

巴文軒丸瓦 III類B(図8・15)

文様モティーフはIII類Aと同じで、やや小振りの瓦である。巴は丸みを持つ頭部より半周まわる細い尾を持つ。珠文は小粒である。瓦当と丸瓦の接合方法もIII類Aと同一、瓦当径は9.8cmを測る。

巴文軒丸瓦 III類C(図8・16)

文様モティーフはIII類A・Bと同一であるが、珠文がやや疎である。珠文の数は19個を数える。外縁はやや高く、幅は1.8cmを測る。瓦当面は縦長となり、丸瓦に対し鋭角につける。頭部は幅が広く6cmを測る。このことから、破風頂部に位置する拝巴、または尾根の角部に配置する角巴としての用途が考えられる。外面はていねいなナデ、内面は細かい布目を持つ。

その他の軒丸瓦

穴太神社にはこれらの他、中央に五輪塔を配し、周囲に縁線と大粒の珠文をめぐらす「宝塔文軒丸瓦」や、中央に梵字「キリーク」を配し、周囲に二本の縁線と大粒の珠文をめぐらし、さらに縁線が取り巻く「梵字文軒丸瓦」が從来より知られている。

(2) 軒平瓦

唐草文軒平瓦 I類(図9・17.18)

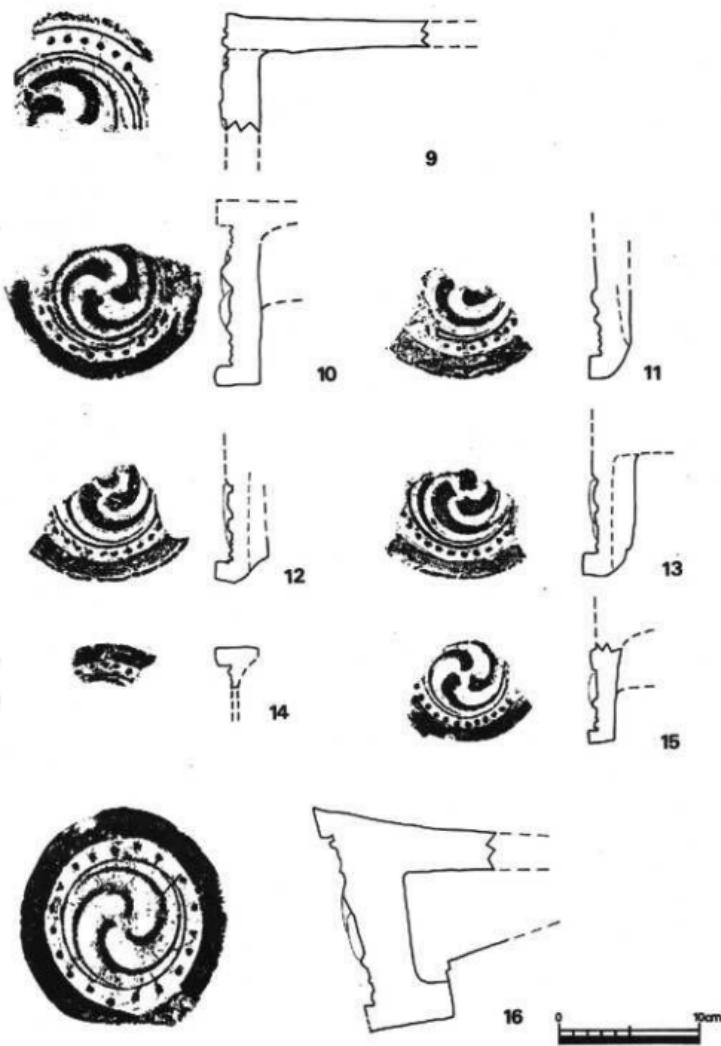


図8 軒丸瓦

半載花菱文を中心に飾り、左右に独立した唐草文様が重なって4回反転する。両端の唐草は上外方へ流れる。頸部はゆるやかな曲線頸で、平瓦部凸面は瓦当付近を端面平行のナデ、他は側面平行のヘラナデを行ない凹面には細かい布目がみられる。瓦当の厚みは4.3cm、平瓦部の厚みは2.5cmを測る。

唐草文軒平瓦Ⅱ類(図9・19,20)

中央に花文を配し、両方へ独立した太いC字状の唐草の主葉と子葉が両方へ3回反転する。外区上下には圓線を区画し、狭い外線を持つ。頸部は浅めの段頸で、深さ10cmを測る。平瓦との接合部断面は、平瓦端部の下に頸部だけを貼りつけて瓦当部としていることがわかる。このことは、頸部だけがはずれた瓦当(20)がみられることからわかる。平瓦部凸面は太目の斜格子叩き、凹面は細かい布目を持つ。瓦当の厚みは4.2cm、弦幅は推定26cm、平瓦部 厚みは2.2cmを測る。

唐草文軒平瓦Ⅲ類(図9・21~24)

中央に書文を配し、両方へ6転する繊細な唐草文様を持つ。唐草のつるは、中途で一旦途切れ続き、両端は上外方へ流れる。上下に主葉と子葉が細かく配される。外区には圓線がとり置き、外線は高めである。頸部は深い曲線頸で、深さ2.8cmを測る。平瓦部との接合部断面は、瓦当背面に斜の継ぎ目がみられる。平瓦部凸面は、側面平行のヘラナデ、凹面は細かい布目がみられる。瓦当の厚みは5.8cm、弦幅は推定30cm、平瓦部の厚みは2.7cmを測る。

唐草文軒平瓦Ⅳ類(図9・25)

書文3個を中心飾り、独立した唐草文様が3回反転する。外区には圓線をめぐらし、外線は高い。頸部は深い段頸で、深さ2.2cmを測る。平瓦との接合部断面には、瓦当部背面に斜の継ぎ目が観察される。平瓦部凸面は側面平行のヘラナデ、瓦当付近は端面平行のナデがみられ、凹面にはていねいなナデを施す。瓦当の厚みは6.1cm、平瓦部の厚みは3.8cmを測る。

唐草文軒平瓦Ⅴ類(図9・26~31)

半載花菱文を中心に飾り、左右に独立した細い線の唐草文様が折り重なって5回反転するが両端の唐草は上外方へ流れる。中央の花菱文は、花弁の間に子葉を一枚配している。外区には圓線をめぐらし外線は高い。唐草文軒平瓦Ⅰ類のモティーフの系譜を引くものであろう。頸部は段頸で、深さ2.5cmを測る。平瓦部との接合部断面は、瓦当部背面に斜の接着筋がみられる。平瓦部凸面は側面平行のナデ、凹面は細かい布目後ナデにより調整する。瓦当の厚み5.7cm、弦幅推定26cm、平瓦部の厚み8.5cmを測る。

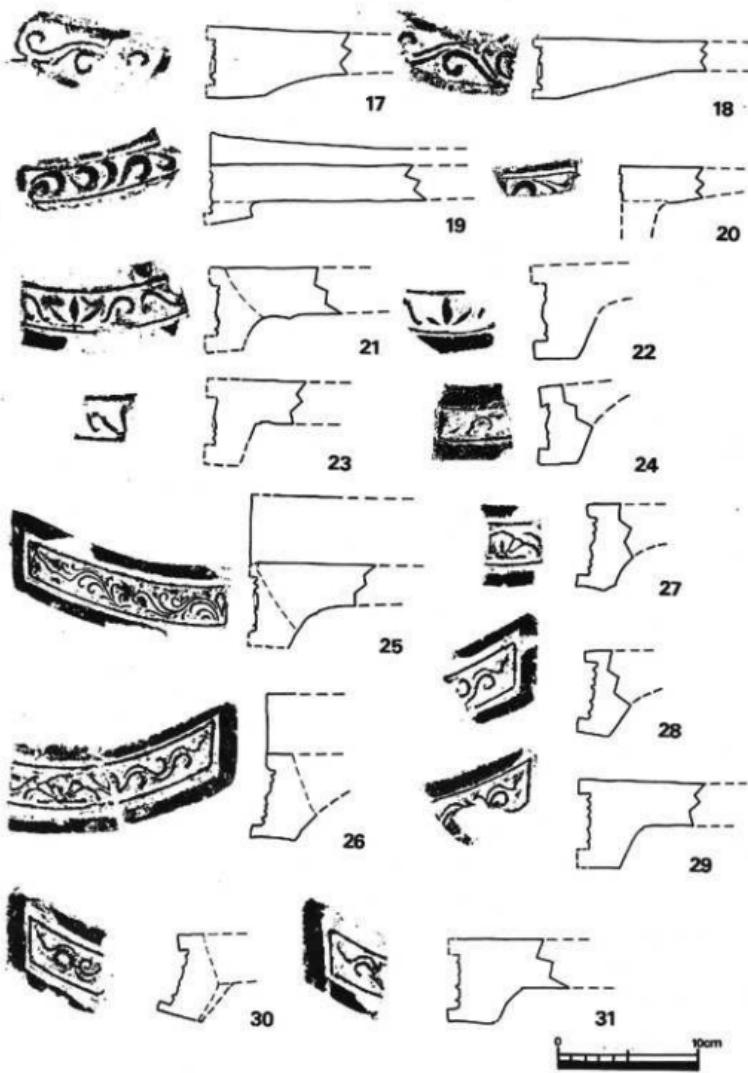


図9 軒平瓦

唐草文軒平瓦Ⅵ類(図10・32~36)

中心筋が外向きC状を呈し、そのまま連続したつる状の唐草文が上下に四回反転する。葉には主葉と子葉が表現されている。外区の圍線は両端を画せず、高い外縁につながる。頸部は段頸となり、深さは1.7cmを測る。平瓦部との接合部断面は、瓦当背面に斜の接着痕がみられる。平瓦部凸面は側面平行のヘラナデ、凹面には細かい布目その後ナデで調整する。瓦当の厚みは2.9cmを測る。

唐草文軒平瓦Ⅶ類(図10・37)

中央に宝珠を配する。両方へ連続したつる状の唐草が3転し、両端の唐草は上外方へ流れれる。外区には圍線がめぐり、幅広の低い外縁を持つ。頸部は幅狭の段頸で、深さ2.5cmを測る。平瓦部凸面は側面平行のヘラナデ、凹面は全面ナデで、厚さ1.8cmときわめて薄い。瓦当の厚みは3.7cm、弦幅は1.55cmを測る小振りの瓦である。

剣頭文軒平瓦(図10・38)

幅1cm、長さ1.1cmの剣頭文を現存8個連ねる。頸は幅狭の段頸で、深さ1.1cmを測る。平瓦部は、凸面は瓦当付近で端面平行のユビナデ、他は側面平行のヘラナデ、凹面には細かい布目が残る。瓦当部の厚みは2.8cm、平瓦部の厚さは1.2cmを測る。

蓮珠文軒平瓦Ⅰ類(図10・39)

大粒の珠文を配する瓦で、上下に圍線を有するが、断片のため両端の形状は不明である。頸はやや浅目の曲線頸である。平瓦との接合部断面は、平瓦端部下に頸だけを貼りつけ、平瓦端面を瓦当面として利用している。この技法は唐草文軒平瓦Ⅱ類と共通する。平瓦部凸面は側面平行のヘラケズリ、凹面には布目がみられる。瓦当の厚みは3cm、平瓦部の厚みは2.6cmを測る。

蓮珠文軒平瓦Ⅱ類(図10・40)

小粒で19個の珠文を配する。外区には圍線がとり囲み、外縁は低い。頸部は深い段頸で、幅2.6cm、深さ1.7cmを測る。平瓦部は凸面に側面平行のヘラケズリ、凹面には細かい布目が残り、わずかにナデを行なう。瓦当高3.6cm、弦幅1.75cm、全長22.9cm、平瓦部の厚み1.8cmを測る。やや小振りの瓦である。

(3) 平瓦

平瓦については出土量が膨大なため充分な分析を行ない得なかったが、凸面の成形法によって大まかに三つに分けることができる。

凸面を繩叩きで成形するもの、凸面に斜格子叩きを用いるもの、凸面に文様叩きを用いないものがあり、それぞれⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類とする。これを詳細にみるとさらに次のような特徴

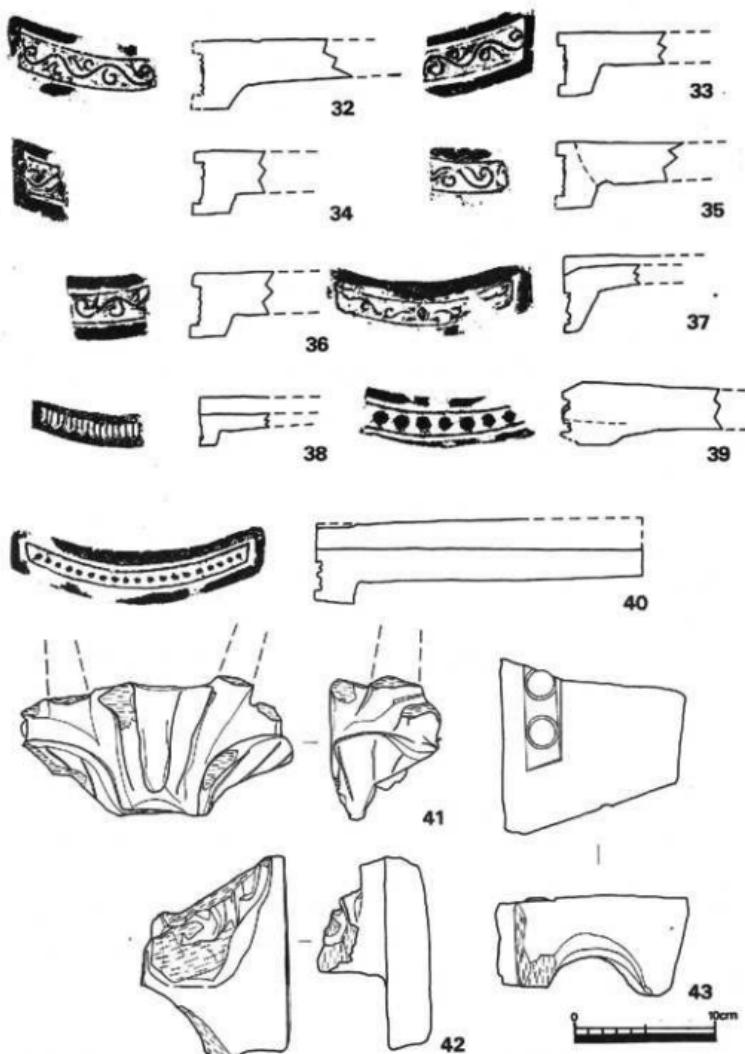


図10 軒平面
瓦

が見い出せる。

平瓦 I 類 a (図 11・44)

凸面の叩きが粗く、凹面の布目も粗い。厚みは薄手である。

平瓦 I 類 b (図 11・45)

凸面の叩きが密で凹面の布目は粗い。

平瓦 I 類 c (図 11・46)

凸面の叩きが密で凹面の布目は細かい。

平瓦 II 類 a (図 12・47)

凸面に繩叩きの後不整形な斜格子がみられる。凹面は布目の後ナデ調整する。

平瓦 II 類 b

凸面には整った細かい斜格子叩きを行ない、凹面は布目の後、ナデ調整する。

平瓦 III 類 a (図 12・48)

凸面は無文板叩き、凹面は細かい布目またはナデ

平瓦 III 類 b

凸面はていねいなヘラナデ、凹面は細かい布目またはナデ調整

なお、相対的にみて、第 4 トレンチには I 類が多く、第 5 トレンチには II、III 類が圧倒的に多い。

(4) 丸 瓦

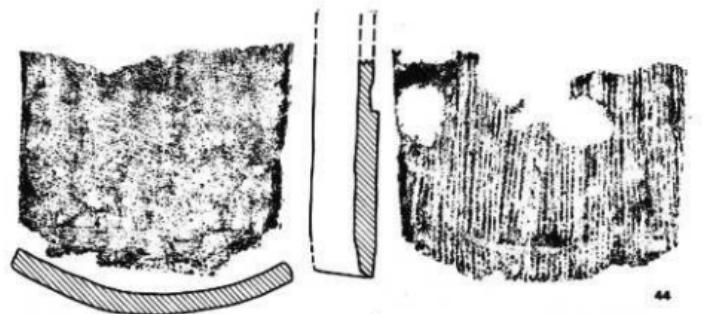
丸瓦には、外面に繩叩きを残すものと、ていねいなナデまたはヘラケズリを行なうものがある。また内面にはほとんど布目がみられ、粗いものと細かいものがあるが形態的な分類を行なうまでに至っていない。今後の研究課題であろう。この他、玉縁に釘穴がみられるものも數点存在する。

(5) 鬼 瓦 (図 10・41～43)

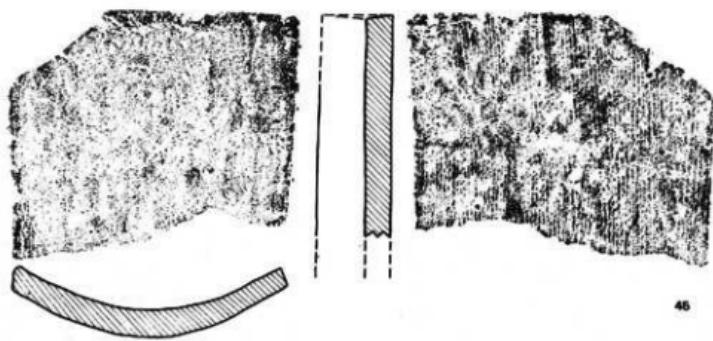
(41) は、四本の角を持つ鬼面文鬼瓦で、眉を突出させた立体的なつくりである。眉毛は太いヘラ沈線によって表現されている。現存幅 1.9 cm、(42) は鬼面文鬼瓦の足元の部分で、下方に丸瓦のえぐりがみられる。ひれは無文で 3 cm の厚みを持つ。耳と顎の一部が残る。現存高 1.6 cm、(43) は、鬼瓦の足元と思われる。幅は 1.8.5 cm、厚み 7 cm の大型品である。外縁に大粒の連珠文帯を彫り込む。

(6) 雁振瓦 (図 18)

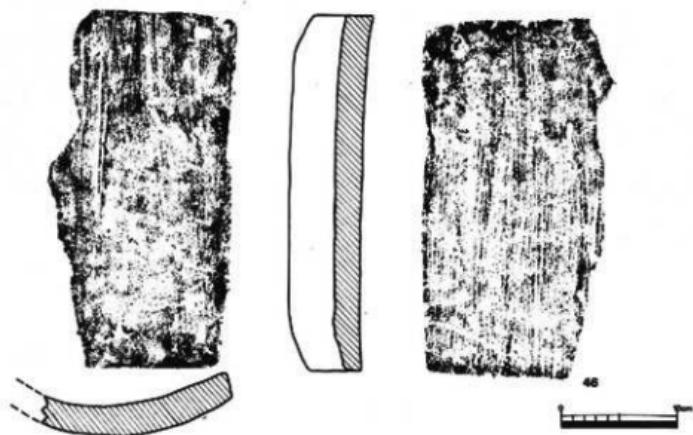
冠瓦とも伏間瓦ともいう。棟の最上段に使用する瓦で、古代の駒斗瓦と丸瓦を合わせたものである。幅 2.7 cm、長さ 2.8 cm を測り、中央部が極端に隆起し、高さ 1.1 cm を測る。片側



44

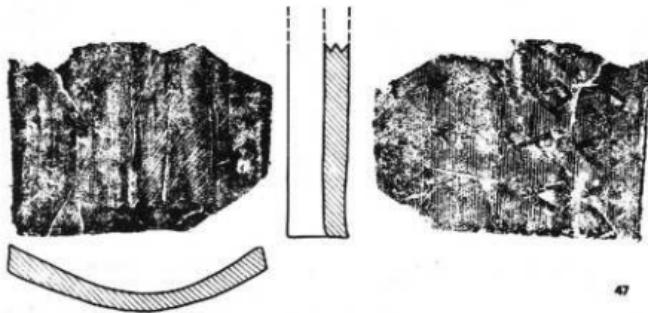


45

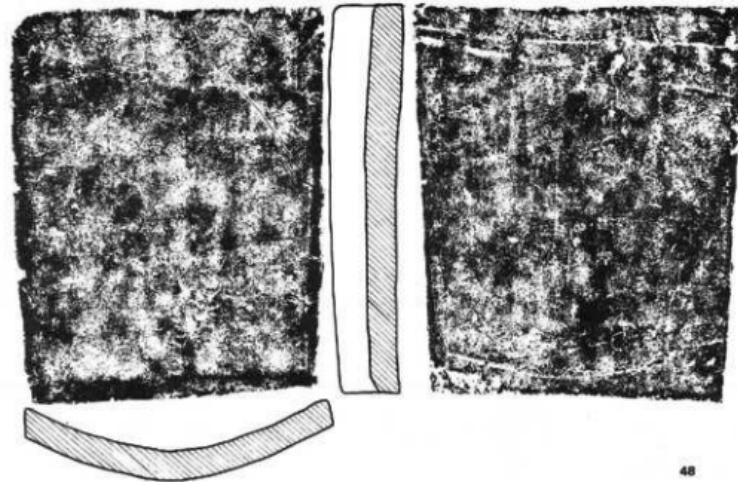


46

図11 平瓦



47



48



図12 平瓦

の隆起部端面には玉縁がつく。

陶磁器、石仏(図14)

(1~4)は第1トレンチの落ち込み造構、(6・7)は第1トレンチ内(5・8~11)は第4トレンチ、(12)は第5トレンチでそれぞれ出土している。

(1)は土師質の小瓶である。

器表はロクロナデである。

(2)は直口の口縁部を持つ唐津焼の碗である。白色の磁胎に光沢のある緑灰色の釉がかかるもので、体部には発色の悪い呂須でやや大きめの網目文を施文する。全体には釉層は厚く内外面の一部に袖肌が認められる。

(3)は灰色のやや粗い磁胎に光沢のある灰白色の釉が薄くかかる。高台部および体部下半は露胎で顯著なケズリが認められる。

(4)は花崗岩を用いた石仏である。石材は上面が平坦であるが、下面是やや不整形で安定が悪い。両側面には矢の痕が残り、裏面は丸くなる。表面には馬蹄形の光背を彫り込み、胸の中央で合掌する僧形の仏像が刻まれている。顔面は破碎され、衣服や身体の細部は表現されておらず、稚拙なつくりである。

(5)は乳白色の磁胎に光沢のない乳白色の釉を薄くかける。口縁部と体部下半に團線を配し、体部には発色の悪い呂須で網目文を染付ける。

(6・7・9)は、「くらわんか手」と称される伊万里焼の碗である。(6)は厚目の底部から内窓して立ちあがる。高台に2条、高台脇に1条の團線を配し、体部には草花文が発色の悪い呂須で淡漠に描かれている。見込み部は重ね焼きのため輪状の露胎部を残す。(7)は白色の磁胎に光沢のあるガラス質の釉が厚めにかかる。(6)同様高台に2条、高台脇に1条の團線が廻り、体部には斜線を配する丸文を施文する。内面体部に2条の團線を配し、見込み部中央には五弁花を染付ける。見込み部には輪状の重ね焼き痕がある。(9)は肉薄の高台が付く碗で、白色の磁胎に光沢のある灰白色の釉が薄くかかる。見込みには重ね焼き

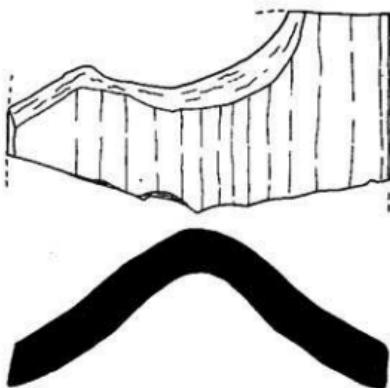


図13 雁振瓦

痕を残す。

(8)は、ほぼ垂直に高台がつくもので、疊付外面には面取りが行なわれている。釉は淡赤色で光沢があり、釉層も厚く全体に細かい貫入が入る。

(10)は、蛇の目高台を持つもので、高台部および体部下半以外は光沢のある淡緑色の釉がかかる。内、外面共に細かい貫入が入る。

(11)は、備前焼きの櫛鉢である。口縁部外面は肉厚で2条の凹線が廻る。内面は櫛状工具により、8本単位とする櫛目が全体に施されている。焼成は良好で色調は赤褐色を呈する。

(12)は、瓦質の壺である。口縁端部を外方向へ折り上げる技法で作られたもので、体部外面は叩きで成形している。焼成は良好で色調は灰色を呈する。

出土遺物のまとめ

穴太神社境内で多数出土した古代末～中世の瓦については、これを史料に伝える大日山千眼寺の瓦と考えることができる。今回の調査では、平安時代に漸り得るものから、室町時代頃と思われる瓦まで、多數の瓦が出土している。したがって、これらの瓦類の詳細を解明することにより、千眼寺の存続年代や、その実態を明らかにすることも可能であろうと思われる。しかし、この時代の瓦の編年や研究は、残念ながら現在のところ充分進んでいいるとは言い難い。例えば、蓮華文軒丸瓦II類は、讀絞のますえ煙瓦窯で生産された軒丸瓦に酷似する。その瓦の年代は、セットになる軒平瓦とこれと近似意匠の平安京出土の瓦より12世紀前半の年代が与えられている。^{注1} また、曲線頸を有する連珠文軒平瓦I類は、最近の八尾市内出土各資料の共伴遺物から、少なくとも14世紀以前（おそらく鎌倉時代）には存在していた可能性が考えられる。^{注2} しかし、この他の資料については、今のところほとんどその年代を明確にできない。しかし、おおよそ平安時代から室町時代に至るまでの期間が千眼寺の存続年代として推定される。また、この時代の瓦や陶磁器が、現在の宮町一丁目一帯より出土しているところから、この寺院が、少なくとも一町四方以上の広大な寺域を有していることも確実であろう。しかし、その実態の解明は、今後の調査研究に待ちたい。また、本報告で紹介した、陶磁器や石仏は、ほとんどが江戸時代以後のものであり、穴太神社やその傍に存在したと思われる千福禪寺関係の遺物であるが、一部に室町時代頃に漸るものがあることも注目しておきたい。

（米田・原田）

注1. 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』18号、元興寺文化財研究所 1978

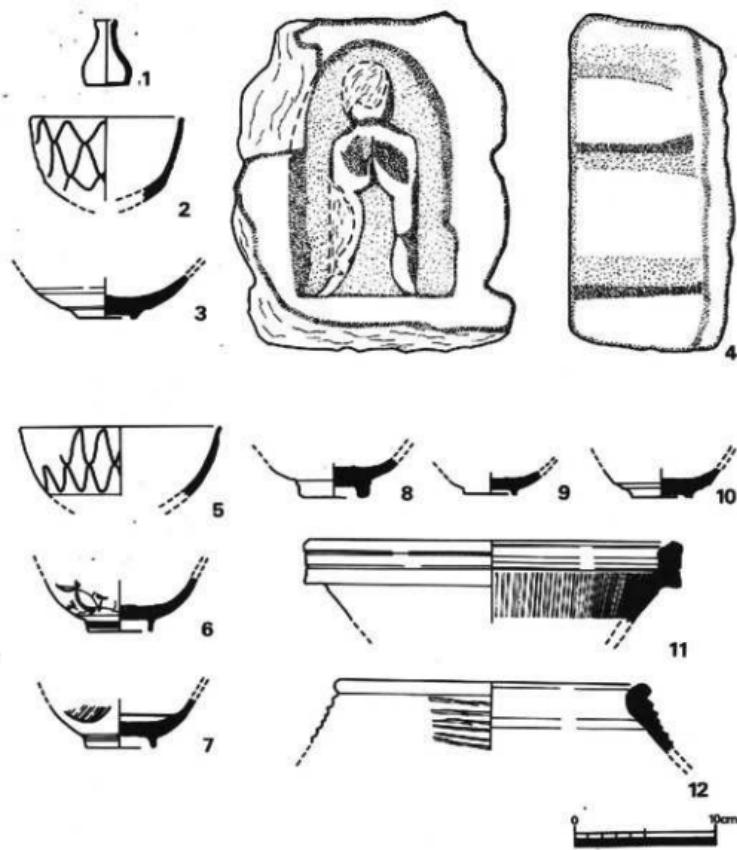


図14 近世磁石仏

注2. 本書掲載資料参照

宮町一丁目出土の中国磁器

ここに紹介する資料は、昭和56年2月7日八尾市水道局が行なった送水管付設替工事に際して出土したものである。遺物の出土状況については明確にできないが、出土した二個体の中国青磁はいずれも完形品である。出土地点が明確である事とともに、千眼寺との関連を考えると興味深い資料となろう。

出土地点は、八尾市宮町1丁目で、現在の穴太神社の南西100mのところである。出土層位は、現地表下80cmのところで、灰褐色微砂粘土層より出土した。

(1) 水注

口径4.0cm高さ7.8cm底径3.9cmを測る。口縁部に割り傷がある以外は、無傷の完形品である。胴部中段の下地にはケズリによる調整が行なわれていて、幅0.8cm程度の平端面が一周している。高台は低く、ややいびつなつくりで、疊付部分には雑なヘラケズリが行なわれている。把手は胴部中段から胴部上段にかけて貼り付けられている。

注口は胴部中段から胴部上段のやや下位置に貼り付けられていて、注口の中位で外方向に角度を変えている。注口の先端は直径0.6cmで右傾方向の角度に切られている。

釉は淡緑色で光沢があり、釉層も厚く貫入は認められない。また、胴部内面の一部と疊付けは露胎となっており、淡茶褐色の地肌が認められている。他に釉肌が胴部に1ヶ所と、山傷が4ヶ所口縁部の内面上部に認められる。焼成は良好で、胎土には乳灰色の精度を使用する。

(2) 双耳瓶(花生)

口径5.8cm器高16.1cm高台底径4.8cmを測る。内寄する胴部よりすぼまり、外反してラッパ状に盛がる口縁部に続いている。口径部中段には継ぎ目があり、外面で



図15 出土地点

は段を有し、内面では継ぎ目に沿って沈線が一周している。高台部はやや外方向に開いていて疊付部分は、ヘラによる搔き取りがみられる。耳は頸部中段の両側には対象に付けられていて、象と思われる図柄が陰刻で表現されている。環は不遊環で、右の環が少し上方に付けられているが、双方共に縦4.8cm、横4.1cmでやや円筒状を呈している。

釉は深味のある深緑色で光沢があり、釉層も厚く貫入は認められない。高台部は外底面にまで施釉されているが疊付部分は露胎となり淡茶褐色を呈する。また、胴部外面と高台部外面の一部には釉肌が認められる。（原田）



図16 中国青磁

八尾市域における中世瓦の新資料

八尾市域には數十ヶ所に及ぶ中世瓦の出土が知られるが、発掘調査に伴う出土資料を把握できるようになったのはこの数年である。特に、昭和56年度の発掘調査により検出例が増加している。

真觀寺周辺（図17・1～3）

真觀寺は中世末期から營なされた寺院で、応永元年（1394）に島山満家の発願で建立されている。昭和54年1月にこの真觀寺に隣接する北龜井町2丁目の工場建設に伴う発掘調査によって、巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦、複合鋸齒文軒平瓦が出土している。

伝庵華寺跡（図17・4）

從来より八尾市安中付近に比定されてきた。

昭和56年3月住宅建築工事に伴う立会調査で土器溜めを検出したが、この際唐草文軒平瓦断片が出土した。この土器溜りは挟山編年埴期の瓦器椀と共に伴している。

金性寺跡（図17・5・6）

金性寺は、別宮八幡（矢作神社）の神宮寺とされ、現在も南本町から高美町にかけて字名が残っていた。昭和56年1月、高美町四丁目の倉庫建設に伴う発掘調査によって瓦積みの井戸を検出した。この井戸からは、挟山編年埴期の瓦器椀が出土している。

駅迎寺山（図17・7～14）

真觀寺の北800mの北龜井町2丁目に所在する通称駅迎寺山と云われる土壇は、文永5年

(1268) 大和西大寺敷尊が650人に菩薩戒を授けたとされる龜井の駅迎堂の跡とされる。

昭和56年12月、駅迎寺山の西50mの工場建設に伴なう事前発掘調査で、連珠文軒平瓦が出土している。ここにおいても低平な器形に粘土ひもを貼りつけた高台を有する瓦器碗が共伴しており、挾山編年の晉～晋期に比定できる。

向山瓦窯表採資料(図17・15)

向山は、大竹集落の東方に所在する標高70mの独立丘陵である。この丘陵の南側の池に面して瓦窯址が存在していることは、すでに「大阪文化誌2巻2号」で紹介されている。

本資料は昭和57年1月6日、当文化財室による遺跡踏査で、ここにおいて採集したものである。この均正唐草文軒平瓦は、中央に花弁を配し、両方へ四転する独立したC字状の唐草を配する。額は段額で、平瓦部凸面は便面平行の綱叩きをていねいに行ない、凹面には細かい布目がみられる。この瓦は、12世紀中葉に比定されており、醍醐寺大智院等に供給されたとされている。^注

(米田)

注 上原真人、前掲

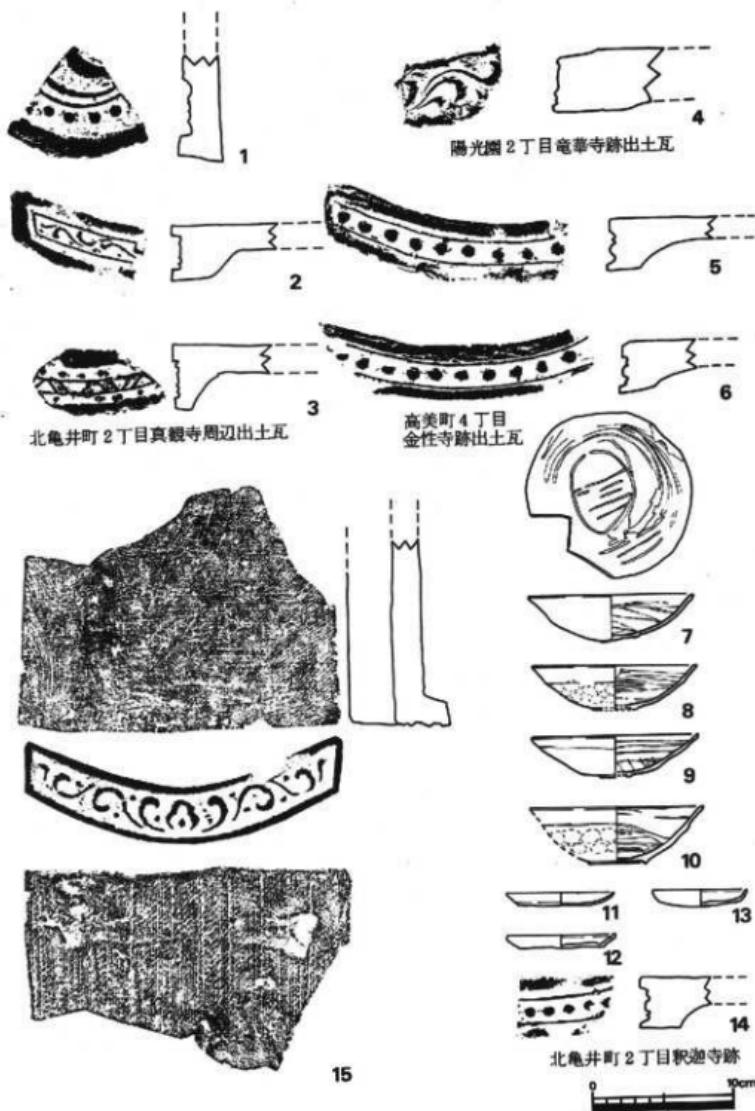


図17 八尾市域における中世瓦

千眼寺と千福寺について 一史料を中心として一

今回の調査区域である千眼寺跡に関する史料の紹介と若干の考察を試みる。まず、史料における初見は、『河内鎌名所記』延宝七(1679)年の出版のものである。

穴太村 大日山千眼寺旧跡 天照大神・春日・住吉社あり。

この『河内鎌名所記』が出版された延宝年間には既に千眼寺旧跡と記され廃寺となっている。この事は、三十年余り後の正徳年間に出版された『和漢三才図絵』にも同様の記載がある。

大日山千眼寺 在穴太村 今唯無寺有礎耳 有三社 天照大神 春日 住吉

これらの史料から千眼寺は、十七世紀末の延宝年間には廃絶していたが、上記二つの史料にみられるように神社の名称は記されていないが、天照・春日・住吉の三社が合祀されている。穴太神社の創建は未詳であるが穴太神社には社殿改修の際に棟木に付されたと思われる棟札が五枚残されている。それによると「萬治戊戌曆」「享保三年」「享保十八年」「天保六年」「嘉永六年」の年代が記されており、萬治年間(1658年～1660年)には、社殿が改修されているので穴太神社の創建は遅くともこれより以前の十七世紀初頭まで遡り得る。

さて、十七世紀末には廃絶していた千眼寺についてはこれらの史料のほかに穴太神社氏子の谷元正一氏が所蔵されている小鐘銘がある。この小鐘の銘文は、『穴太神社御由緒』(昭和十三年刊)⁽³⁾で解説されている。

大日山千福古寺

小鐘銘有引(引トイフ字右旁アレバ刻カト思ハルレド矢張引ナルベシ、引ヘ漢文ノ一
体ニシテ序ノ如キモノナリ)同州若江郡穴太村鎮守境内ニ一寺アリ其開創幾百歳ナルカツ
知ラズ老農皆之ヲ伝ヘ謂フ古来七堂伽藍ノ地ニシテ莊嚴頗リニ日月ノ光ニ映ジタリト百事既
ニ廢スルコト此ニ一百年ナリ

客秋九月中旬本庄村屋年寄官座一老(年長ケタル人)等其寺ヲ以テ我福寺(庭訓往来ニ
「禅家ニハ都寺監寺副寺」ノ謂見エタリ寺領ヲ知リテ取扱ヲスル役)慈航神足(神足ハ名
ナルベシ慈航ハ次ニ説ク)ニ付シ旧觀ニ復セント欲ス山僧之ヲ聞キテ希奇(奇特ノ意)ト
為シ終ニ請者ノ願ニ順フ今春一小鐘ヲ鋤用イテ朝暮暮鐘ノ号令ト作ス因リテ此事ヲ記シ之
ヲ億兆ニ明カニスト爾云フ

金銀銅ヲ転ジテ円通ニ浴スルコトヲ作ス(円通ハ円通融通ノ義ニシテ仏菩薩ノコト此ニ
テハ觀世音菩薩ライフ、浴スルハ其恩恵ヲ受ケルコト)通身(一身全体ライフ純ノコト)
是レロ(鐘ハ鳴ル人ハ口ヨリ聲音ヲ出スニタトフ)声虛空ニ徹ス三神(天照大神住吉春日
ノ三神)德盛ニシテ万民家々豈カ人々住ヒ吉春日東ヨリ出デ天照妙用其福增隆大ニ法窟
ヲ開キ重ネテ津風ヲ振フ

正徳三年龍集（龍ハ星ノ名ニシテ集次ナリ此星一年ニ移ルコト一回ナリ故ニ一年ヲ龍集トイフ、龍集トハ年号ノ下干支ノ上ニ記ス語ナリ）癸巳仲春（陰歴二月）毅旦（吉日トイフニ同ジ）妙徳鉄拐（妙徳ハ号鉄拐ハ鐵杖ニ同ジ自分ヲ謙称シテ老病トカ野叟トカイフニ同ジ）道脊山僧（道脊ハ名ナリ）五葉軒ニ書ス。諸主（諸主ヘ此事ニ尽力シタル人々トイフナリ）千福禪寺住持慈航（慈悲ハ弘誓ノ船ノ意ナレバ僧ノコトトイナルベシ）元梯（名）当庄村屋同年寄同宮座同氏子中

この龍名には千眼寺の文字が見当らず、千福古寺・千福禪寺と記されているが、この点について『中河内郡誌』（大正十二年刊）では

穴太神社域に巨石数多あるを見る。これ和漢三才図絵に云う所の礎にして、大日山千眼寺ここに在りしものにしてく中略寺号を千福寺となせどこれ誤を伝えしものなるべし、延宝七年藏版の河内鑑名所記には明かに大日山千眼寺と書せり。〈以下略〉⁽⁹⁾と述べられているが、若干の疑義がある。一つは、「河内鑑名所記」が出版された延宝年間から、この小鐘が鋳造された正徳年間までの四十年足らずで自らの居住地の寺号が誤り伝えられるだろうか。二つには、「和漢三才図絵」の著者は、穴太村の記載については、何かの文献を引用したものか、実際に穴太村を訪れて村人に千眼寺の伝承を聞いたのかは定かではないが「河内鑑名所記」の記載と違って、今唯無寺有礎耳とあたかも実地見聞したかのような記載である。その上「和漢三才図絵」は、小鐘の鋳造年代と前後する正徳五年には出版されている。同時代にあって伝承の地穴太村では千福寺と伝えられ、「和漢三才図絵」では千眼寺と記載されている。

そこで、元禄三（1690）年に記された『諸事覚書記』に次のような記載がある。

渡辺勘兵衛穴太村氏神千福寺ノ森に陣取、いわゆる大坂夏の陣で徳川方の渡辺勘兵衛についてである。ここで千福寺という寺号を用いている点に着目すれば、千福寺は、千眼寺の寺号とともに伝承されていたと考えられる。

以上のように、『中河内郡誌』で述べられている千福寺は、千眼寺の誤った伝承であると直ちに断言することはできない。そこで、以下のように捉えるのが妥当ではないだろうか。

千眼寺の創建と廃絶については全く不明で傍証する史料は今のところ見当らないが、廃絶後は、千眼寺と伝承され、それは、「河内鑑名所記」や「和漢三才図絵」が出版された頃も同様であったろう。同時に、「諸事覚書記」の記された元禄三年頃より正徳年間にも千福寺と伝承されていた。つまり、二つの寺号が穴太村に伝承されていたのである。しかし、穴太村の人々の願いで、この地に寺院を再興するにあたって銘文にあるように禅宗の僧侶がその任にあったため、千福禪寺という寺号を用いたのである。つまり千眼寺という寺号の意味する千手千眼觀

音は、真言宗系の寺院の本尊であるので、禅宗寺院としては相しくないため千福寺号を用い千福禪寺としたのであろう。そして、千福禪寺の由緒を正すためにこの寺院の前身の寺院を千福古寺として小鐘銘に刻んだのではないかろうか。大日山千福禪寺の号は、前出の穴太神社に残る棟札にもみられるので、小鐘を鋳造する際にだけ、千眼寺を千福寺に誤って使用したものではないことは確かであろう。なお、この棟札の享保三年、享保十八年、天保六年の三枚には大日山千福禪寺の号がみられるが、嘉永六年の棟札にはその号が記されていない。棟札で見る限り千福禪寺は、正徳三年（1713年）から天保六年（1835年）までは存してて、それ以後嘉永六年（1858年）までの間に何らかの理由で廃絶したのであろう。

以上、千眼寺に関する若干の考察を試みたがいずれも推察の域を出まいことは否めないであろう。今後の検討を要するものと思われる。

註(1) 三田淨久著 「河内鑑名所記」（1679年刊）

(2) 寺島良安著 「和漢三才図絵」（1713年とされているが実際には1715年に出版されたと著者自身記している。）

(3) 桜井玉三郎編 「穴太神社御由緒」（1938年）小鐘銘については、当時京都天龍寺管長関精拙氏が解説され、西山全太郎氏が解説されている。本文に引用したものは、西山氏の解説文である。この解説及び解説には若干の疑問があるので以下の註釈で述べておく。

(4) 西山氏も引は刻ではないかとされているが、漢文の一体として引にされているようである。しかし、小鐘自体の文字を検討するとやはり引には読めず刻であろう。

(5) 関氏の解説でも、一老とされているがこれは、老農皆伝えの箇所の老の文字とはかなり相違が認められる。それで、前の宮座に注目すると、穴太神社の宮座は穴太村だけでなく、穴太村に西隣する佐堂村にもあったと前出の「穴太神社御由緒」に記されているので、ここでは、穴太村の宮座だけを指すという意味で、宮座一姓と読むべきであろう。

(6) 三神は、天照・春日・住吉と解説されているにもかかわらず、人々住ヒ吉春日と読まれているのは疑問である。この箇所は、住吉春日東ヨリ出デシ天照とされるべきであろう。

(7) 妙徳と号する寺院は、中河内近辺では見当らない。

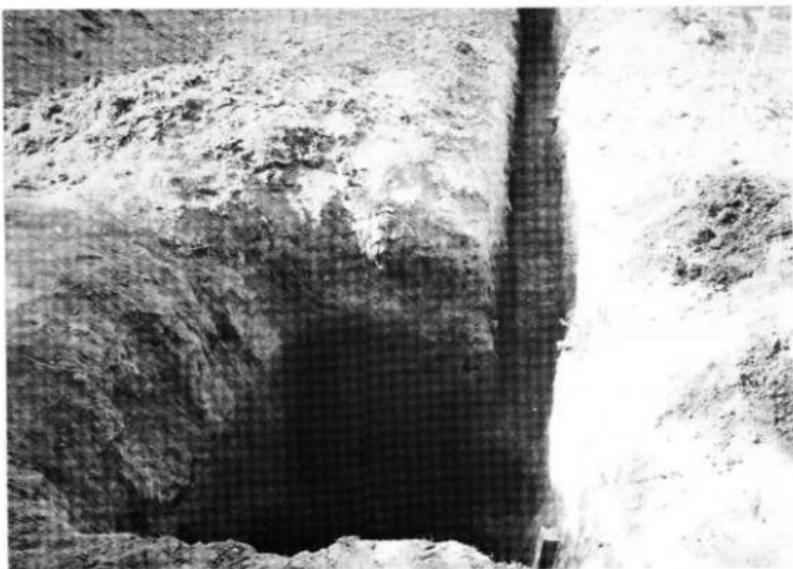
(8) 丘葉軒は、禅宗寺院の隠寮ではないだろうか。

(9) 中河内郡役所編 「中河内郡誌」（1928年刊）

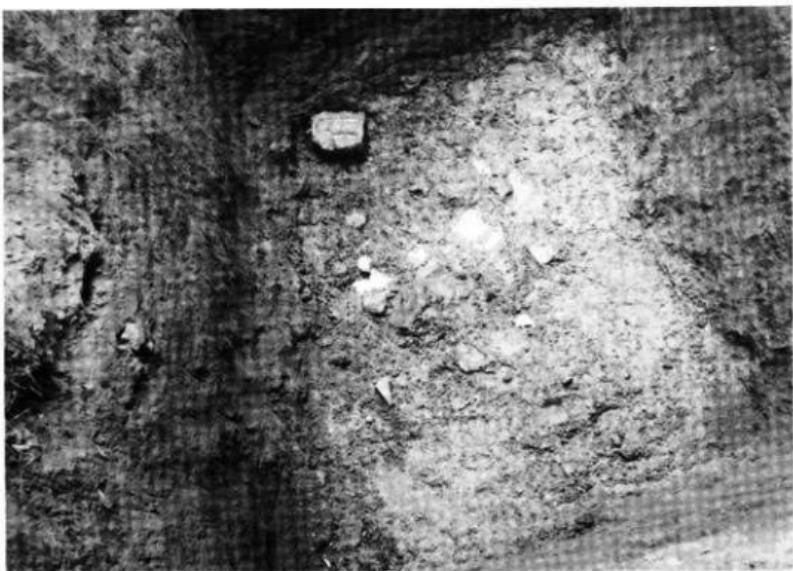
(10) 八尾市史編纂委員会「八尾市史」（史料編）

(11) なお、千福禪寺当時のものと思われる観音像が現在通称子安観音として旧穴太村内（八尾市宮町二丁目）に安置されている。

（駒澤）



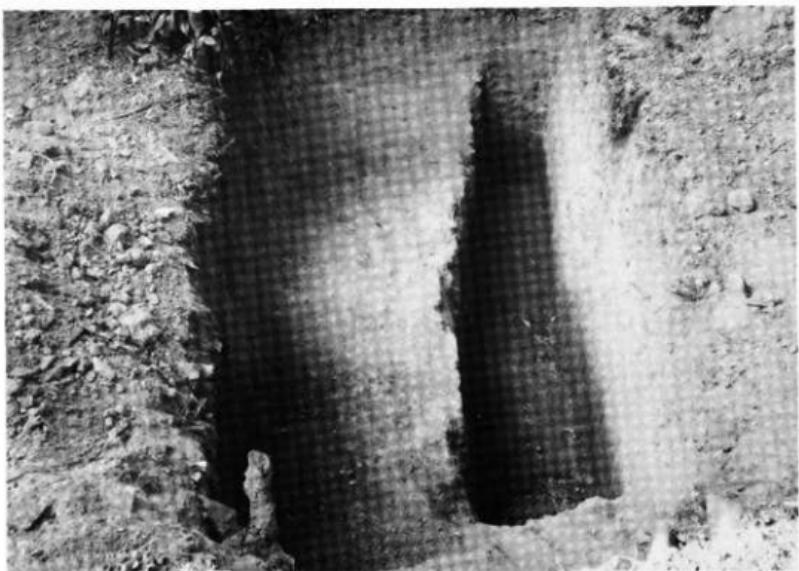
第1トレンチ



第1トレンチ落ち込み遺構



第2 トレンチ



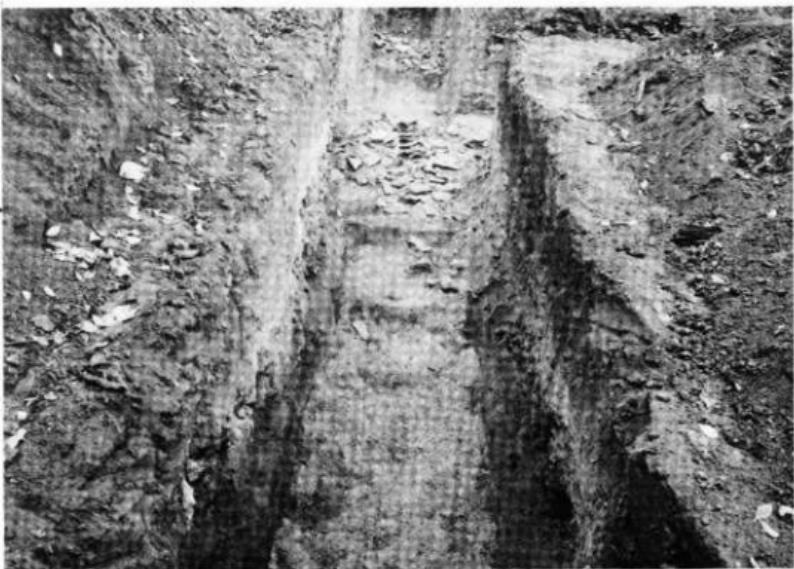
第3 トレンチ



第4 トレンチ



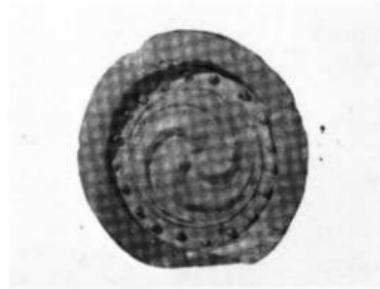
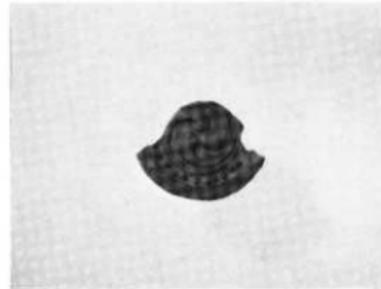
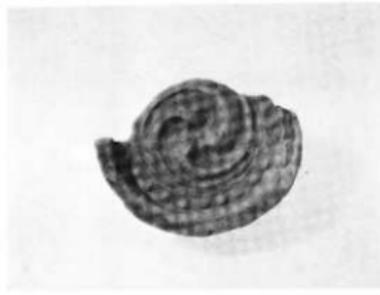
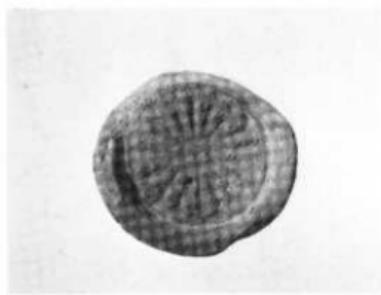
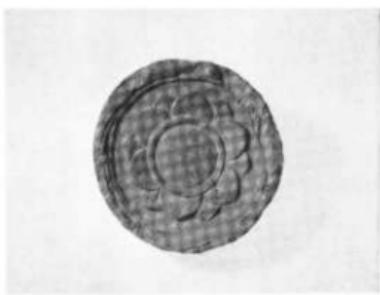
第4 トレンチ遺構検出状況



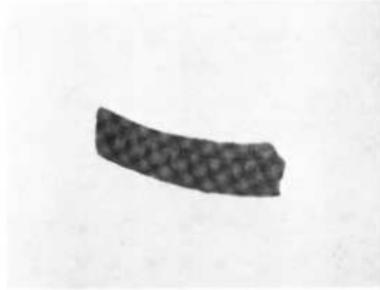
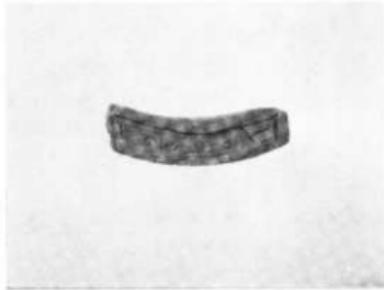
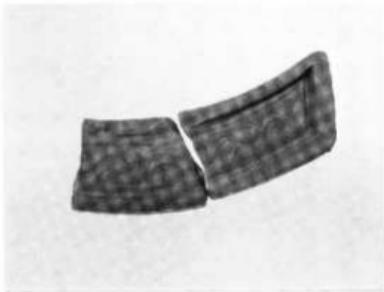
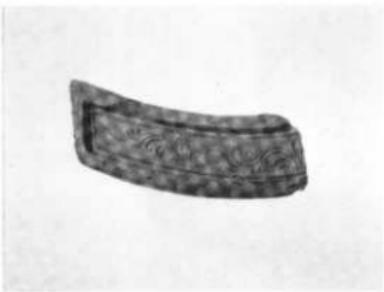
第5トレンチ



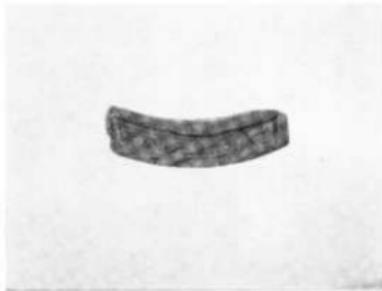
第7トレンチ



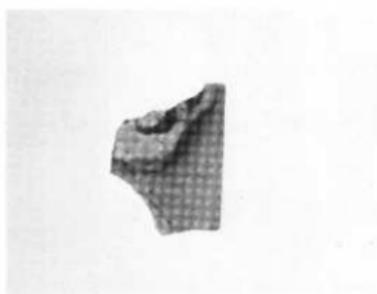
出土遺物



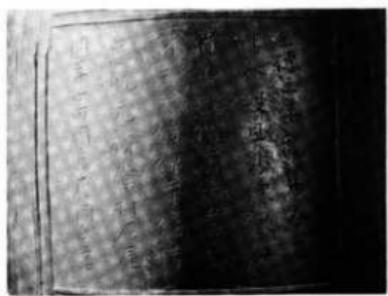
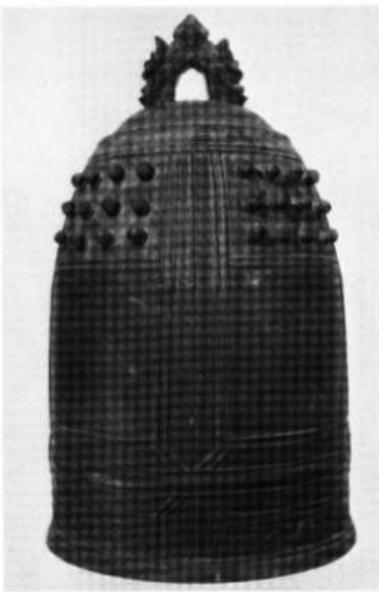
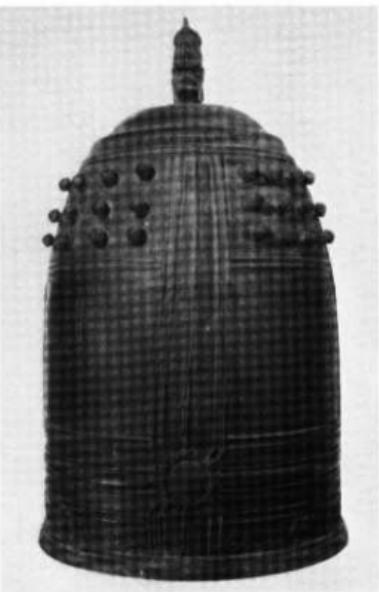
出土遺物



出土遺物



出土遺物



伝千福禪寺鐘銘

